



司会 どうもありがとうございました。午後のセッションは、これまでと異なりまして、皆様方に自由に発言できるような形にしたいと思っております。

5. 提案「四国NGO連絡会の設立」について

菊地 午後のセッションを始めさせていただきたいと思います。午後のセッションは、私の方から、「四国NGO連絡会」というのを設立されてはいかがでしょうかと、あくまで私どもJICAが考える形をご提案させていただいて、それに基づきまして、皆様方の活発なご意見を是非お聞かせいただいで、議論していただきたいと思っています。一応、2時50分頃までいただいでいますが、私の説明というのは10分か、その程度で留めさせていただいて、基本的に皆様方が午前中の講演、あるいは中間報告、あるいは、皆様方が既にこの提案を聞いて、どう考えるのかというようなことを中心に、皆様方が意見を発表していただくというセッションにしたいと思いますので、よろしくお願いたします。

それでは、ご説明をさせていただきます。この資料は、四国内のNGOとJICA、あるいは地域国際化協会の連携モデルをつくるための意見交換のたたき台ということでご覧いただければと思います。

まず出発点なのですが、昨年3月16日、17日と、「四国地区自治体、NGO等国際協力に関する意見交換会」を開催させていただきました。本日お越しいただいでいる方々は、ほとんどご参加いただいでいるので覚えていると思いますが、非常に活発な意見交換、事例紹介、及びワークショップを2日に渡って開催させていただきました。この時にJICAへの要望ということで、皆様方が多かったのは、今日もお話がありましたコミュニケーションの場をつくるか、あるいは人材育成プログラムの実施、そして、あるいは諸団体の取りまとめ、あとは途上国ニーズへの適切な情報やアドバイスの提供というのがございました。

続いて、今回の会議を開催するに至った契機なのですが、皆様方で多かった意見としましては、議論をJICAにリードしてほしい、あるいは、どうやって連携するのか、そのテーマを考えてほしい、あるいはJICA、NGO、自治体、三者間ではなく、個々に連携を目的とした会議をしてほしいということでした。ですから、本日は対象としてNGO様と地域国際化協会様を対象にさせていただきます。また、JICAとNGOの連携の具体的な形を見せてほしい、この4点が多かった意見でした。これを基にして、会議のテーマが、NGO間のネットワークをつくるということだったのです。

続きまして、JICAとNGOとの連携ということで、JICAにおける連携の必要性というのが出

できました。これは、平成10年1月に「21世紀に向けてのODA改革懇談会」があり、この時に初めて国民参加型援助という言葉が出てきました。大きな協力としてNGO支援の流れというのができたと思っています。また、それを踏まえまして、平成11年8月の「政府開発援助に対する中期政策」で、具体的にNGO支援をどうしていくかということが、ODAの中で議論されていったと記憶しております。

続きまして、JICAの連携ですが、JICAの連携というのは大きく分けて三つあります。一つは「相互理解の促進と人材の育成」。具体的に言いますと、NGO-JICA協議会というのを開催しております。それと「NGO-JICA相互研修」といいますと、NGOとJICAの担当者が一堂に会しまして、2泊3日の泊まり込みで研修を行うというものです。確か11月に行われたと聞いております。あとは、NGO国内長期研修といまして、NGOの方を日本の国内の大学院に2年間、修士課程に留学していただくという制度とか、あるいは、「NGO活動現場派遣」、NGOの活動現場へ技術者を派遣するスキームとか、あと、「NGO人材育成研修」ということで、2週間海外視察も含めまして、日本国内のNGOで働く方を研修に参加していただくというようなスキームもあります。また、事業実施上の連携といまして、先ほどから何回もお話しております小規模開発パートナー事業とか、開発パートナー事業です。また、海外で支援する開発福祉支援ですとか、あとは皆様方が提案した形での民間提案型プロジェクト形成調査ですね。そういったものもござります。最後の形が、広報・開発教育の連携ということで、これは各県におきまして、国際理解講座をJICAが支援させていただいていることとか、あるいはNGO-JICA協議会の中に開発教育小委員会をつくって、開発教育に関する議論を行っております。

では、四国においてJICAとNGOはどういう連携をしているのかということですが、大きく分けて三つあります。一つは、オイスカ四国研修センターで、JICAの研修員を15名お引き受けさせていただいて、約1年間のプログラムを実施していただいております。それと、「徳島で国際協力を考える会」様には、小規模開発パートナー事業で、ザンビアのルサカ市でレントゲンの設備を供与し、また、施設も設置していただく事業を委託させていただいております。また、各県の国際交流協会様には広報や開発教育事業で連携させていただいております。ここからですが、情報交換やコミュニケーションの仲介役として、私ども国際協力事業団が何ができるかということ、まさにこれからのお話だと思いますが、まず、国際協力推進員を、今は愛媛県と高知県、愛媛県国際交流協会様と高知県国際交流協会様に間借りという形で配置させていただいております。これを4月以降、香川県、徳島県にも配置させていただくことが決まっております。

そういった方を通じて、本日のような意見交換の機会を提供させていただいていくというようなことを、これからさせていただくことになると思います。その流れとして、「四国NGO連絡会」というのをつくっていけばいかがでしょうか、というのが提案です。私も先週、沖縄に「NGO-JICA合同ワークショップ」で出張していたのですが、その中で、沖縄のNGOの方がこういったことを言っていました。「皆さんの国際協力に関する意識が集まれば、きっと何らかの形のネットワークができるだろう。そのネットワークができれば、きっと何か生まれるだろう。」と言っていたのが非常に印象的でした。それでは「四国NGO連絡会」というのはどういう形になるのかというのを簡単に図示してみましたのでご覧ください。主役はあくまでNGOの方です。行政的な立場から申しますと、そう言った連絡会をつくるのが私どもの仕事ではなく、連絡会をつくるように、あるいはつくった場合にサポートする、そういったものが私どもの仕事だと思っております。NGO連絡会、JICA、あるいは自治体でのトロイカ体制というか、トライアングルを形成して、お互い意見交換をし、良い事業ができるかと思っております。その時に重要になるのが、各県の国際交流協会やJICA国際協力推進員だと思っております。NGOと自治体とのパイプ役として、各県の国際交流協会というのは非常に重要だと思いますし、NGOとJICAのパイプ役とし

て国際協力推進員の活躍する場が非常に大きいのではないかと、そう考えております。

私の説明は、ここまでにさせていただきますので、ここから先は、まさに本日皆様方がどう考えているかということ色々お聞きしたいと思います。自由討論にさせていただきますたいのですが、主にこの2点を議論していただければと思っています。NGO側から見たJICAや各県国際交流協会の連携についてどう考えるかということ、あるいは、NGO側の考える連携やネットワークの必要性などについてどう考えるかということ、皆様方からご意見をいただければと思っています。一応、本日のスケジュールとしましては、皆様方のご意見を伺ったあと、次のページでアピールの案をつくりましたので、これについて、できれば本日アピールを採択できるぐらいまで皆様方の合意を得たいと思っています。

私の説明は以上で終了させていただきますので、これから先は皆様方から本日の講演、中間報告、そして今の私の話に対する意見をいただければと思っています。よろしく願いいたします。まず、本日の話し合いに参加して、NGO側の考えるネットワークや連携に際してご意見のある方は、是非、挙手の上お話を聞かせいただければと思います。

長尾 去年から会に参加させていただいて、高知の前田さんのグループとよく似た活動をしています。私は盲人野球を世界に広めようという役割をしまして、その中で「四国でこういう大会ができないか、前田さん。高知に知覚障害者でやっているところと一緒にできないか」と話したら、すぐ話題が出てきまして、今度私が高知の方に試合の申し込みに行こうかという話があったのです。それは、こういう会があってはじめて、そういう広がりが出てきたのですね。こういう会で大体よく聞くのは、「うちはこんなことをしている、うちはこんな立派なことをしている、うちも負けないでこんなのをやっている」という意見で止まっているのですね。そうではなく、僕が足りない部分を誰かに教えてもらおうとか、力を貸してもらおうという形でやっていけたら、それこそ小さいネットワークではないかということです。

菊地 今の長尾さんのような例で、去年の会に参加して初めて知り合えたNGOとこの1年間、共同事業をした例とかありましたら、ちょっとこの場で報告していただきたいと思いますが、では、「えひめグローバルネットワーク」の竹内さん。

竹内 昨年の会議は、私ではなくて黒川が参加させていただきました。その時、「徳島で国際協力を考える会」の方と知り合いになって、今度4月の下旬にこちらが主催する会議の方に参加してもらえないかとお声をかけさせていただきました。そうしたら、ただ来るだけではなくて、私たちはモザンビーク支援をしているものですから、徳島大学のモザンビークの留学生を連れて一緒に来てくださったというようなことがあります。モザンビークの方というのは、全国でもたった10人ぐらいしかいないような状況ですので、来ていただけるのはすごく嬉しかったのですね。その経緯がありますので、直接また私もお話したいと思っております、先ほど太鼓によるコンサートなどを一緒にできないかいうところまで、今お話ができています。今、ご意見が出ていましたが、そういった団体同士が具体的なイベントの企画とか、助成金の申請とかまでいくようなセッションなどを設けられると、大変ありがたいと思います。

菊地 ありがとうございます。「徳島で国際協力を考える会」の福士さんが、ご意見があります。

福士 まず、昨年の会議の後、私たちの方でも、先ほど紹介していただきましたが、「えひめグ

ローバルネットワーク」の会議に参加させていただいたり、今回お見えでないのですが、高知の「アジア・僻地医療を考える会」の方とも色々と意見交換をさせてもらった後に、我々が開いている勉強会に、高知からわざわざ参加して下さったり、というようなつながりが広がりました。そういう、いい意味での広がりというのが、たった1回の会議でできたわけで、こういうことを続けていくと、もっともっと、広い輪ができていくと強く思っています。色々な団体が、色々な考えのもとに色々な事業をしているという面で、非常にお互いの接点を理解し合えて共同で事業をするということは、なかなか難しいのかもしれませんが、しかし、ある意味、ファンドレイジングだとか、色々なイベントの共同開催のようなものは、割と簡単にできるのではないかと思います。例えば、海外の方を日本にお招きして、その文化を紹介してもらおうとか、そういうような事業をしたいと思います。国際協力ではなくて、国際交流の方に入るのかもしれませんが、そういった場合に、海外から誰かを呼ぶのは非常にたくさんのお金がかかるわけなのですが、制度の中には交流事業に対して助成金が出る事業があります。それをうまく利用することによって、我々だけで呼ぶべし大変な事業になってしまいますが、みんなの力を合わせて呼ぶことによって、経費を軽減できて、大きな事業ができるメリットが生まれてくると思います。そういうところから始まっていいのではないかという気がします。

菊地 ありがとうございます。

有田 ちょっとよろしいですか。

菊地 はい。

有田 すみません、議論の途中で中に入って。一つ少し気になった点があるものですから、忘れないうちに申し上げたいと思います。海外の開発専門家、色々な有識者を日本に招聘して、色々なイベントで話してもらおうと外から呼ぶ必要もないのかと思います。私どもは研修員の受入れ事業というのを別にやっているわけでございます。四国にも当然、研修員もおりますし、そういった人たちを積極的にイベントに呼んでいただいて、色々な視点で話していただくということも一つ可能なのかなと思います。別途、海外から有識者を招聘するプログラムも私ども持っておりますが、それをするよりは、身近なところでそんなことも考えられるのかと、少し思ったものから。

長尾 私も一度提案した事があるのですが、今度アジアの障害者を呼んで、日本のいいシステムを見てもらって、研修してもらおうということで、私一度申請書を出して見事に蹴られました。JICAが呼んでいるのは、偉い公務員の方とか、大変偉い人が、たくさんいますが、それでなく、もう一つ下げて、海外では分からないシステムを紹介してもらおうようなスキームができればもっと底辺の話が聞けるのではないかと思います。

有田 一般論で申し上げれば、平成14年度から、私どもの事業の中で、自治体との連携事業という形で、いわゆる研修員の受入れにも別にその枠を設けています。先ほど提案がありましたように、三者間でよく話合っ、こういった人を呼べないか、あるいは、こういったことができないかというのは、話の次第で十分可能ではないかと思ひます。ただ、ひとつひとつの事例について、この場でコミットメントというわけにはいきませんが、そういった意味でも四国支部とのコーディネーション役になっていただいて、分からないことはどんどん聞いていただいき、進め

ていくことが必要なのかと思います。ただ、プログラムとしては十分対応できるプログラムだと思いますので、行き違いとか情報不足というのはあるのかも分かりませんが、そういったことをまず解消していくことが重要だと思います。

慶目 今の件でちょっと補足なのですが、先ほど、小規模開発パートナー事業で応募されて、残念な結果になったということをおっしゃっていましたが、平成12年度は、今年度と募集のやり方が全然異なっておりまして、デッドラインを決めて、事業提案段階から、プロポーザルを出していただいていた方式をとったのです。正直申しますと、80件ぐらいの応募がありまして、どうしても予算の枠が20件ほどしかとれなかったものですから、結果として19件の採択内定という格好にさせていただいたのですが、平成13年度からは、そういう方式ではなくて、デッドラインを決めずに、随時検討していきましょうというやり方です。

アイデア段階で四国支部と相談をしていただいて、JICAと皆さんと一緒に書き上げていく、いきなり〇×は付けられないということによってしておりますので、来年度どうなるか詳細はまだ固まっていますが、ホームページでおそらく5月、6月ぐらいにアナウンスをさせていただこうと思っています。

菊地 議論の方向が個別具体的なスキームになってしまいましたが、ここでもう一度話を元に戻して、連携というような形で議論をしたいと思います。先ほど私の方からお話をさせていただいたような、皆様方で、皆様方のボランティアな発意の下「四国NGO連絡会」を設立するような形で話を持って行っていただきたいというのが私どもの考えですが、それに対して何かコメントはございますか。

まず、竹内さんから。

竹内 先ほどこの資料の中で、アピールというのが出ていましたので、これを本日、採択するのかどうかということを確認しておきたいと思いました。だいたいこのアピールは何のアピールで、誰に対してどこに出すのかということと、四国NGOの連携で、ということになっているのですが、実際は“JICAと”というところが入っていないことです。今の段階では四国のNGOの中で四国のNGOだけが連携を、だからNGOが主体というのが望ましいところではありますが、今回の会議に参加している限り、NGOだけが集まって相談する機会はありませんので、NGOだけでその意思確認をすることがまだできていないと思います。そうすると、四国NGOとJICAというように変えないと、今の段階では、このアピールの採択は難しいと思います。それから文言の中でも、色々ちょっと細かく、私は見せていただいて少し変えてほしいところが具体的にはあります。もう一つ、大きな点で、この書いてある「おもてなしの心」が息づいているということは確かにご指摘の通りなのです。ここの四国だけに特有の文化というのは生まれているのです。それはそれで、大変良いところであり、地域に根ざしたということを考える時に、こういう地域の文化を考えないではできないというのは分かっているのですが、これをアピールに入れるということは、その発想自体が日本全国規模であるJICAの発想なのです。国の発想であって、いわゆる全国の旅行ガイドに出てくるようなイメージで、こういうイメージを四国のNGOに植え付けてほしくない、ちょっと言葉がきついかもしれませんが、どちらかという、もう少しNGO同士が集まった中で、こういうアピールをつくらせてもらいたかった、という気持ちがあります。

菊地 はい、ありがとうございました。

伊藤 私はあと3分ぐらいで出なければいけませんので、ちょっと一言、言っていきたいと思えます。確かにNGOの間で、まず話されなければいけないと思えます。お話を聞いていて感じたのですが、例えば私たちのJANICが立ち上がった時もそうなのですが、先ほど、長尾さん、福士さんもおっしゃっていましたが、海外の自分たちのカウンターパートを呼ぶ、代表がアフリカ、モザンビークとか、あるいはラオスだと思うのですね。1週間呼んで、そのお金はJICAから出すと、1週間の間に、例えば四国国際フェスティバルをやって、その中で連携をして、そこからはじめて、集まって何かやろうかという雰囲気が出てくると思えます。余計なことかもしれませんが、我々の時にはそういう形をとったのです。その時には、外務省のお金を最大限に活用させていただきました。ある意味では、そういう間接的な支援がNGOを立ち上がらせると思えます。だから、そういったような間接的支援が、行政はあってもいいのではないかと思えます。そのためには、四国から、東京の本部に提案をして、本部を動かすぐらいのご努力をされた方がいいのではないかと思えました。

菊池 伊藤事務局長、本当に本日はわざわざ東京からお越しいただきましてありがとうございます。

では、続きまして、「香川国際ボランティアセンター」蓮井事務局長の方から発言があります。

蓮井 私どもはラオスの青年同盟と友好関係があり、プランの中に、相手国の総裁をお呼びしたいというのがありますが、本当に小さな団体が相手国の総裁、いわゆる大臣クラスをお呼びすることが、もうほとんど不可能に近い状態ですよね。でも、相互理解をするためには、そういう機会をつくらないとなかなかお互いに理解が出来ない。私どもは、どんどん行くのですが、向こうからは来てもらえない。どなたか代わりのもので行くことではいけないと思えます。東京で参事官とか大使館側の人に来るのではなく、やっぱり相手国のその人に来てもらわないと。やはりフェイス・トゥー・フェイス、ハート・トゥー・ハートだろうと思えます。そういうことが可能になるような、何か知恵を授けていただければと思えます。これから、こういうものが立ち上がって、立ち上がったあとはお金の面も含めて、お知恵もご拝借できればと思えます。

菊池 はい、ありがとうございました。

それでは、先ほど「えひめグローバルネットワーク」の竹内さんからお話がありましたが、このアピールは、私どもが独断でおつくりさせていただいたものです。これは、本来であればNGO様がつくって、自分たちで発表していただくものだったのですが、今回、会の主催者としての立場から、何かこの会議の成果を目に見える形で残したいと思えます。そういったことに対して、この会議の参加団体として、こういったものを採択するか、しないかという議論も含めて、本日は話し合いたいと思えます。皆様方の中で、ここまで踏み込んで書く必要はない、あるいは採択する必要はそもそもないということがありましたら、それは尊重しなければいけません。そう思っています。こういったことに対して、皆さん、ご意見があれば、はい、竹内さんのご発言のあと、オイスカの石井副会長の方からご発言いただきます。

竹内 続けてすみません。私自身は、このアピールを採択することは、この会議の成果として賛成なのです。ただ、今回の会議そのものがやはりJICA主催ですので、そしてまた、ここに集まっているNGOだけで、四国のNGOのアピールという形はどうかと思えます。それならやはり、NGO-JICA、あるいはJICA-NGOどちらにするかも決めなければならないと思えますが、とにかくJICAとNGO、四国のJICAと四国のNGOの合同のアピールだというような位置付けであ

れば、お話が進められるのではないかと思います。

菊地 オイスカの石井副会長の方からお願いいたします。

石井 各NGOの皆さん方、それぞれ生い立ちも目的も違うわけですね。今日、16団体お越しいただいておりますが、この中で、よく似ているNGOの方もいらっしゃるわけで、例えば、植林をしているNGO、あるいは、人づくりをしているNGO、また、アフリカで援助をしているNGO、様々なNGOがあるのですが、例えば1年間のNGOの年間スケジュールをJICAでまとめていただいて、一つの1年間のスケジュール表のようなものをつくっていただく。NGOは財源がございませんので、その費用負担はJICAでしていただくとか、そういったようなこともお考えいただいたら大変ありがたいと思っております。

本来、NGOというのは、助成金はいただきたくないのです。あくまでも自主財源で行いたいわけではあります、なかなかそうはいきません。それで、助成と申しますか、補助をいただくを得ない。もし、そういうものができあがりましたら、JICAから、例えば「こういう助成が出ますよ」と、いち早く報告をしていただく。そのようなことで、NGOをまとめていただけるのであれば、大変ありがたいと思っております。

菊地 はい、ありがとうございました。続いて、愛媛県の国際交流協会の八塚様から。

八塚 「愛媛県国際交流協会」の八塚と申します。竹内様が申された意見に私は大変賛成しております、ここにはNGOとおっしゃいまして、私の知っているNGOの方々もいらっしゃるし、存じ上げている方が来いらっしゃらないというも見受けられます。NGOのネットワークをつくるという意味合いで、果たしてどんなNGOがそこに入ってくるのか、おそらく基準というもの、ネットワークの形というものが見えないと、地域の国際化協会としては、どう対応して良いのか分からないというのが心情でございます。参加してやってみようという意見は、非常にありがたいと思っておりますし、素晴らしいことだと思いますが、目に映る目的、目に映る活動が国際協力という意味であれば、全てネットワークに参加してよいものかどうか、このあたりも私どもとしては市民の皆さん、あるいは県民の皆さんに紹介する際に、慎重に対応したいと思うものですから。このネットワークをどういう形にしておきたいのかというのは、非常にちょっと気になるところです。

菊地 今回お話した内容は、全て「ネットワークをつくりましょう」という前提です。では、そのネットワークの先にあるものというのは、実は誰も何もしゃべっていないのです。私どもも、あえて口にできなかったところがありまして、それは、「私どもが口にすべきことではないのか」というところがありました。これについて各NGO様で「このネットワークをつくったら、自分はこういうことをイメージしている」というようなことがありましたら、ご発言いただければと思います。

竹内 先ほど色々なNGOのスケジュールを、四国のJICAでまとめていただけないかというご発言がありましたが、私もそれには賛成です。それから、もう一つ、これは愛媛県国際交流協会と松山市国際交流協会が昨年、一緒にネットワーク会議を開催しまして、その時に出てきた案件なのですが、愛媛県下のNGOの拠点、例えば、愛媛県だけでも、今治にも松山にも宇和島にも、そういう団体があり、愛媛県下のどこに何の団体があるかというのを、マッピングをしてほしい

というのが一つ。それからもう一つは世界地図。例えば、モザンビークだったら「えひめグローバルネットワーク」が、フィリピンだったら、他の団体が、とか。世界地図の中に、四国のNGOが関わっているのはどこなのかというのが見えてくると、今度その団体同士で、アフリカは近いからこの団体と、この団体と一緒に集まって、そのアフリカ地域の協力について話し合いをしようとか、一緒にスタディツアーを組みましようとか、具体的な企画につながっていくのだろうと思います。

昨年、私自身が愛媛県のマッピング、NGOのマッピングと世界地図のマッピングをしたのですが、できればこれを四国4県ですれば、市民、県民に対して大変分かりやすくなる、一つのツールになると思います。そしてこのアピールも、一般市民に対してアピールするものと、そしてまた、NGOの私たちにアピールするものと捉えられるのではないかと思います。先ほど八塚さんが心配しておられたのは、愛媛県に戻りまして、色々な団体の国際交流・国際協力をしている団体の皆さんを見ると、本当に現場に出て、どんどん国際協力活動をやっていくという団体と、そうではなくて、むしろ地域の在住外国人の方を中心に国際交流をしようとしている団体と、その幅がもの相当あります。やはり、NGOは海外協力活動をやっている団体だけと限定するのか、それとも、市民一般にもっと啓発していかなければいけないという意味で色々な団体も含めて、このネットワーク構想を進めていくのかということ、ちょっと考えた方がいいのではないかと思います。

長尾 それは、私は考えない。とりあえず、みんな来てもらって、その中で、自分自身で考えてもらった方がいいのではないかと思います。線を引くこと自体、私は反対です。どんな小さな団体でもいいから、一度来て、このようなところで話をして、「これは、私には向いていないんだ」と思ったら、そこで引いてもらった方がいいのではないかと。だから私は線引きは駄目だと思います。

竹内 もしそうだとしたら、JICAはそこまで全部含める覚悟が……。

長尾 いや、JICAは提言しているだけで、JICAが何かしようというのではない。新たに、私たちが何かをしてくださいと言う。JICAにここまでおんぶしたら、JICAは逃げると思うんですよ。やはりNGOのグループが集まって、その中で「私はこの会議は嫌。僕はこの会議に向くかも分からない」と話をして、一度つくって見ないと。つくる前にその討論をしていたら、收拾がつかないのではないかと。大きいところばかりが集まって来て、小さいところは全く寄って来られないのではないかと。つまり、国際交流は地域に根ざした国際交流も国際交流だからね。だから、一度みんな来てもらって、その中で、小さいグループももしかしたら、竹内さんのグループを気に入って、「一緒にやらせてください」というグループも出てくると思うので、そこは入れてあげた方がいいのではないかと私は思います。

有田 ちょっと、よろしいでしょうか。JICAの立場で、JICAがこうしろとか、こうしなさいとか、そういうことを言うつもりは全くないのです。そこはまさにNGOの発意というのでしょうか、自分たちはこうやりたい、あるいは、これはおかしいよと。そういったことも含めまして、JICAとしては、例えば相談があれば、それに対してこうすればいいのではないですかとアドバイスはします。でも、特に今回のテーマで、四国NGOネットワークの立ち上げについては、皆様方にご判断をいただいて、必要がないと思ったら、やる必要は全くないと思いますし、やはり1+1の力を5にも、10にもさせていく上では、ある意味ではJICAに対してものを言う時に、あるいは、外に向って何かを発信する時に、やはりここは集まって、グループ化していった方が

いいんだと、そういうご判断をされればよろしい話です。それに対して私どもは、できる範囲で、ご相談があればサポートもします。皆さんでご判断をしていただいて、必要があればやればいいと思います。たまたま私どもは、今回こういう場を提供させていただいたと思うのです。

沖縄の事例をもう少しだけお話しますと、沖縄県では国際交流人材育成財団というところがございます。そちらで、県内の国際協力・国際交流団体のディレクトリーをつくっております。それとは別に、午前中お話を申しあげました沖縄NGO活動推進協議会は、会として別のディレクトリーをつくっております。メンバーは重なる部分もありますし、片方に属して、片方に属していないという団体もいらっしゃいます。沖縄NGO活動推進協議会は、JICAはまさに全くノータッチで、自分たちでつくられた会で、自分たちの方針で運営されています。そのディレクトリーも、広く呼びかけはしていますが、入る、入らないは各団体の自由裁量に任せておまして、「来る者は拒まず」という姿勢でやっております。何を申しあげたいかという、国際交流団体、県の財団とは別の形で、国際協力NGOとしての旗の下に集まる意味では、必ずしもJICAとか地域の国際化協会が関与する必要はないのではないかと思います。

菊地 では、蓮井事務局長お願いします。

蓮井 昨日のNGO列島縦断フォーラム四国ブロックでは、ネットワークの必要性が出たり、いわゆる官民共同のあり方などについての議論、何が共同できるのか、できないのか、もっと言えば、共同しない方がいいのかまで議論がいきかけて、本日のアピールがふっと出れば結構流れ込めたのかという感じがするのです。今日の午前中のプログラムを見ますと、今日の午前中の講演のタイトルは、「四国地区NGO-JICA国際協力ネットワーク会議」となっているのです。そしてお昼から突然、アピールとなってくると、国際交流協会といったいわゆる行政の立場になってくると、「私は、このまま地域に持って帰っていいのか、あそこにも、ここにも声をかけていないのに、私が判断していいのか」と不安になるのは当然だろうと思います。当然だろうとは思いますが、そういう中で立ち上げの第一弾として、「参加するには拒まない、入りたければどんどん入ってほしい、入りたくない人は入らなくていいよ」という、そのワンステップになればいいと思うのです。これ全部が四国のNGOではなく、ある意味では一部なのですが、ここがスタート地点になるんだと理解して、回を重ねるごとに多くの団体が加入をし、輪が広がっていく。ネットワークが広がっていく。そして行政が関わってくる、JICAが関わってくる。色々もっと広がっていくことにつながればいいと、個人的な意見ですが、述べさせていただきました。

長尾 私は、場所をどうするか。ここが一番問題だと思う。香川にするのか。四国のおへそにするのか。場所を決めて、偉い人を決めて、それからでないといけないのではないかと。誰か芯になる人を決めなくては。本日、この話を延々とすれば、この話は暗礁に乗り上げてしまいますよ。柱が、頭があって、場所があったら、必ずこの中に集まってくる気がします。ネットワークをするのだったらまず、この中で一番偉い人を決めましょうよ。その人にみんなが集まったら必ず動くと思います。本日ここで、臨時にでも頭の人をつくってもいいと思います。いかがでしょう。前田さん、どうでしょう？

前田 どうしても、承知置きしておきたいことがあります。まず、私たちはお金がない。夢と希望はあるけれどもお金がないという現実ですね。それから四国は案外広い。そこで問題になるのが、集まる時の交通費です。本当に会議をしようと思つと、必ず集中して年何回か集まらなければいけないと思います。こういうサポートというのはJICAしかないと思うのです。このへん

のことは口を揃えていかなければいけないですね。

それからもう一つ、現実的な問題として、JICAの力が必要ですが、対JICAとなると、どうしてもNGOは3歳児ぐらいになってしまう。JICAに対しては、非常に文句を言いやすいんです。ここが一番私たちの弱いところで、みんな大人ですから、基本的には自己完結型の活動と議論をしていくと。何が一番大切かという、これだけ交通費をかけて、集まった機会を利用して、晴れて準備会を発足させることと思っております。

菊地 結論から言えば、この場では出ないと思っているのですね、先ほど長尾さんが言ったような形の結論が。ただ、もし皆様方が四国NGO連絡会について、設立するかどうかは分からないが、設立することを検討してもいいのではないかと考えていただければ、きっと、このアピールの三番の文章は結構ご満足いただける文言ではないかと思いました。それに関して、意見があるNGOの方、もちろん協会の方も含めまして、コメントをいただければと思います。

長尾 すぐに結論を出さないと満足しないと思うので、一つ提案します。今日、四国4県来ていますよね。その中で、高知の誰か1人代表になってください。愛媛は決めてください。香川は決めてください。徳島は決めてくださいと、とりあえずネットワークの各県の頭になる人を、今日来ている中から決めてもらえればと思います。その中で、ネットワークをつくりあげていけば、もしかしたらできるのではないかと思います。

菊地 今のご提案に対してご意見ありますか。(複数から賛成の発言)

菊地 今の話で、準備委員会といいますか、この四国NGO連絡会というのは、皆様方が検討する土俵に乗ったと、ここで確認できたと思います。続いては、次のステップになるアピール文についてですが、私が今、竹内さんの案で思ったのは、一文目「私たち四国のNGO」というのはおかしいということです。四国のNGOは全てこの考えに賛同したということではないということだと、「わたしたち、2002年3月10日、ここ高松市で開催された『四国地区NGO-JICA国際協力ネットワーク会議』に参加した四国内のNGO」ですか。これでどうでしょうか。第一パラグラフは、ご意見のある方、いらっしゃいますでしょうか。

竹内 第一パラグラフのところ、「今後の四国地区の国際交流・協力活動の推進、発展のため」のあとに、「ネットワークの必要性について」というのを入れた方がはっきりするのではないのでしょうか。「今後の四国地区の国際交流・協力活動の推進、発展のため、ネットワークの必要性について互いに活発な討議を重ねた」と。

菊地 この修正に対して、ご意見がある方、いらっしゃいますでしょうか。(賛成多数)

菊地 では、続きまして、第二パラグラフですね。修正、挿入は、ありませんか。(一同、修正無しで了承)

菊地 では、そのようなことで、この文面で皆様方の採択了承をいただきました。後ほど参加団体の方のどなたかに読み上げていただき、その場で一同の意見とするという作業にとりかかりたいと思います。その前に先ほど長尾さんからご提示がありました、各県の代表のNGOを、もう一度確認させていただきませんか。

前田 高知は「高知県国際交流協会」が窓口になります。

竹内 愛媛は「愛媛県国際交流協会」と連携を図るという条件で、「えひめグローバルネットワーク」が窓口になります。

蓮井 香川については、やはり、国際交流協会は形の上で行政ですので、よりピュアな形として「四国オイスカ」の会長をしています佐藤さんをお願いしたいと思います。本日は出席しておりませんが、石井さんにお伝え願うということで、了解をとりたいと思っておりますが…。

長尾 徳島は木村さんです。

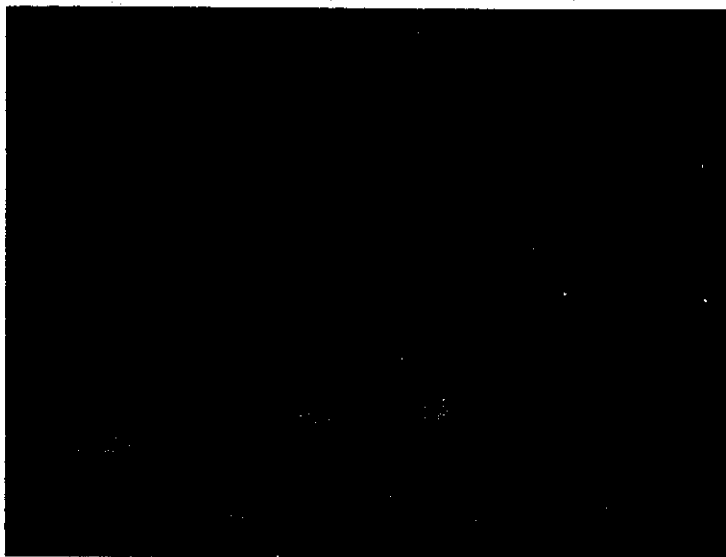
石井 この案内は、JICAからいただけるわけですね。誰がするんですか。準備会のご案内、場所、設定、費用は。

菊地 準備委員会につきましては、理想としては、将来的に皆様方の手で運営していただきたいと考えております。ただ、最初の段階では、私どもも関与をさせていただければと思います。

長尾 2年位してください。2年間は絶対できると思う。

菊地 第一回の準備会合の際にできれば皆様方の中で、幹事というか、リーダーを決めていただくとか、あるいは、今後の方針について議論していただくというような形をとりたいと思います。続いて、先ほど申し上げたアピールの読み上げを、お願いしたいと思います。幹事団体の一つの高知希望工程基金会の山中さんいかがですか。山中さんが読み上げていただいた文章に対して、拍手を持って皆様のご意見の集約とさせていただきたいと思います。

6. アピール選択



「四国NGOの連携による国際交流・協力活動の更なる推進を目指して」

わたしたち2002年3月10日、ここ高松市で開催された「四国地区NGO-JICA国際協力ネットワーク会議」に参加した四国のNGO、各県国際交流協会及び国際協力事業団四国支部は、今後の四国地区の国際交流・協力活動の推進、発展のため、ネットワークの必要性について互いに活発な討議を重ねた。この討議に基づき、私達は本会議の結論を以下のように集約し、併せて相互に協力、連携し四国の国際化を目指していくことをここに宣言する。

1. 昨年9月11日の米国同時多発テロ事件、及びそれ以降に続くアフガニスタン難民に対する支援問題は、日本の人々に対し国際交流・協力活動への関心を高める大きな機会となった。また、近年徐々に大きくなりつつある、NGOやボランティア活動への参加を通じ日本人が国際社会に飛び出し活躍しようとする潮流に対し、私たち国際交流・協力を携わる者は互いに連携して行動していく必要がある事を確認した。

2. 四国にはお遍路さんに代表される「おもてなしの心」が息づいている。海外で、あるいは日本で国際交流・協力活動を通して共に考え、学び、生きる時、その根底に流れるものもまた、「おもてなしの心」である。わたしたちはここ四国から国際交流・協力活動を通じて「おもてなしの心」を発信することを確認した。

3. 組織的に連携する仕組みが重要であるとの認識から、わたしたちはこの会議で「四国NGO連絡会」の設立を目指して、準備委員会を発足させることで合意した。四国地区における国際交流・協力活動をさらに推進させるために、目標とされるような連携モデルを目指すことを確認した。

2002年3月10日

四国地区NGO-JICA国際協力ネットワーク会議

参加団体代表 「高知希望工程基金会」

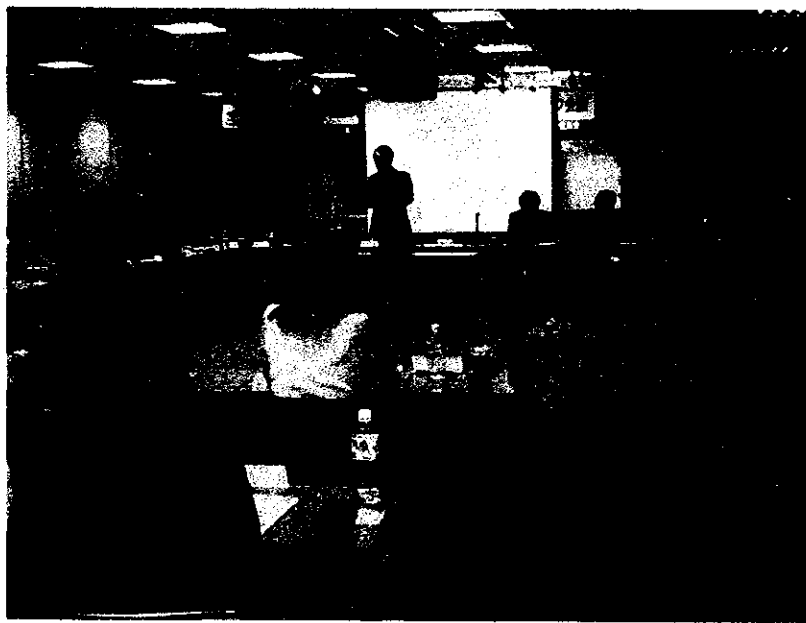
事務局長 山中 茂

菊地 山中さん、どうもありがとうございました。この討議を持ちまして、今後、四国NGO連絡会の準備委員会の発足を含めまして、私どもの方で協力させていただくこととし、皆様方においても、主体的に活動していくことを期待したいと思っております。では、時間の方も20分近く、オーバーしてしまったのですが、ここで、この会議を閉会させていただきたく思います。閉会の挨拶は、当事業団国内事業部管理課長の大島がさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

7. 閉会挨拶

大島 大島でございます。昨日と本日と2日間に渡りまして、お忙しい中、活発な議論を展開していただいたものと確信しております。普段、私は東京におりまして、国内事業部という業務柄、北海道から九州まで機会を捉えて出張をしているわけですが、ここ四国におきましても、NGO、自治体さんの協力を得まして、活発な議論が展開されたということを改めて認識させていただきましたことは、私どもにとりまして、心強い限りのものと確信しております。本日の午前中も色々な議論が出ましたが、私どももできるならば、色々なことをやっていきたい。資金面に

つきましては、制度面につきましても、できるものならば、皆様方の要望を全部くみ上げてやっていきたい。しかし、伊藤さんから話がありましたが、私どもが、ある種の制約の中でのことも事実でございます。ただ、近々発表になるのだろう第二次ODA懇談会の中でも、国民の力を結集し、市民の皆様の一一人の力、参画を得て国際協力を進めていくことが第一に謳われておりますので、まさにそのパートナーとして、NGOの皆様というは、主役そのものだと思っております。午後のセッションでも、JICAと、NGOと、自治体と、それらを結ぶ色々な調整役が存在します。その他にも、本日の議論では出てこなかったのですが、私どもJICAの専門家連絡会というのがあるのです。あるいは、青年海外協力隊のOB会というのも存在します。こういった組織とも連携をとりながら、NGOだけではなく、自治体だけではなく、JICAだけではなく、一人一人がプレイヤーとして機能していくことが重要だと思っております。改めまして、この熱気というものを感じとらせていただきましたことは、私にとって何よりも収穫だったと思っております。今後ここ四国から、皆様方が色々な形で発信していくことができれば、またそれに対して四国支部が可能な限り、お手伝いをさせていただいて、まず一つ何か発信していくようなことを目指してやっていければと、そう思っております。雑駁なご挨拶になってしまいましたが、国際協力事業団を代表しまして、ご挨拶をさせていただきました。本当にお疲れさまでございました。どうもありがとうございました。



国際協力事業団国内事業部管理課長
大島 義也

菊地 それでは、以上をもちまして、四国地区NGO-JICA国際協力ネットワーク会議を閉会させていただきます。皆様方、本当にお忙しいところ、長い時間ご出席を賜りまして、本当にありがとうございました。

資料



「四国地区 NGO-JICA 国際協力ネットワーク会議」

進行次第

- 9時30分 開会挨拶
国際協力事業団四国支部長
小宮 英夫
- 9時45分 講演「国際協力と NGO のネットワーキング～
アジアの貧困削減を目指して～」
国際協力 NGO センター事務局長
伊藤 道雄
その後、質疑応答
- 11時 中間報告「JICA と NGO の連携のあり方研究会」
国際協力事業団四国支部長代理
有田 敏行
その後、意見交換
- 12時15分 昼食
- 13時30分 提案「四国 NGO 連絡会設立構想について」
国際協力事業団四国支部
菊地 太郎
その後、アピール文書提案、採択（予定）
- 14時55分 閉会挨拶
国際協力事業団国内事業部管理課長
大島 義也

「四国地区NGO-JICA国際協力ネットワーク会議」参加者一覧

No.	県	組織名	出席者
1	徳島	財団法人徳島県国際交流協会	専務理事 今崎 聡
2		徳島で国際協力を考える会	事務局長 福士 庸士
3			登 健太郎
4		ハーモニー・ワーク・キャンプ	代表 長尾 洋子
5		WITH・YOU	代表 長尾 孝治
6		烏雲の森 沙漠植林ボランティア協会	代表 木村 義次
7	香川	財団法人香川県国際交流協会	管理課長 岩田 和也
8		財団法人オイスカ四国支部	副会長 石井 淑雄
9			センター所長 中条 清
10			事務局 寺内 和子
11		香川国際ボランティアセンター	事務局長 蓮井 孝夫
12	愛媛	財団法人愛媛県国際交流協会	主事 八塚 優子
13		ODAの木協会	会長 高本 師津雄
14			事務局長 新行内 由紀
15		えひめグローバルネットワークわくわく	代表 竹内 よし子
16			運営委員 黒河 由佳
17			運営委員 江戸 恵子
18		会員 若宮 温子	
19	高知	財団法人高知県国際交流協会	マネージャー 前田 正也
20		高知ラオス会	事務局長 倉橋 静雄
21		高知希望工程基金会	事務局長 山中 茂
22		アジア文化交流会	代表 立田 大城
23	県	徳島県県民環境部文化国際課	主事 渡部 芳枝
24		香川県総務部国際交流課	課長補佐 三谷 雄治
25		愛媛県県民環境部国際交流課	国際交流係長 安藤 勝也
26		高知県文化環境部国際交流課	主査 中屋 妙
27	その他	地域国際活動研究センター	事務局長 杉本 正次
28	JICA	国内事業部管理課	課長 大島 義也
29		国内事業部国内連携促進課	職員 鹿目 武
30		四国支部	支部長 小宮 英夫
31		四国支部	支部長代理 有田 敏行
32		四国支部	職員 菊地 太郎
33		四国支部	愛媛県推進員 田島 雅子
34		四国支部	高知県推進員 大原 健治

1. 四国NGOネットワークを構築する必要性を感じる理由

団体	回答
	<p>現在、四国にも各県内にもきちんとしたNGO（海外に人材を派遣し、顔の見える活動をしている団体）の集まりはな く、質の高い情報交換の場として期待している。</p>
	<p>①現在では各NGOが何をやっているのか全くわからない。 ②連携があれば、NGOの実施面でプラスが多い。例えば、各NGOの年間スケジュール、（イベント、海外派遣）がわ かっていると、活用のチャンスも増える。 ③共通の問題について、前向きに対応することができる。 ④この機会に機関誌を発行しては如何。</p>
	<p>JICA四国支部様が行ってくださる交流会等で、始めて色々な団体の方と知り合い、又、活動等を知り勉強させてもら うことができる。自分の県だけの小さなわくから出て、活動が広がると共に、団体同士のつながりにより大きく意味 のあるネットワークをつくっていきけるのではないかと思う。団体同士の交流も今ままで以上にできよりよい結果がえら れるのではないかとも思う。</p>
	<p>これまで、各NGOが各自で活動してきたが、ネットワークを構築することにより、各団体ではできなかったプロジェクト の実行が可能になるのではないか。ただ各団体ともそれぞれの目的、手法で以て活動しているので、その活動を 抑制しないようなものであって欲しい。</p>
	<p>昨年JICAの四国会があり、その中で私方とよく似た活動を行っている団体があり連絡を取り合い、共同で活動する計 画が出ています。</p>
	<p>NGO は非政府組織である。まずその原点を忘れず、ネットワークを構築することは、差し支えないと信じる。ただ し、何かに頼りに成る物を欲して集団を形成することはいいか？ JICAという「政府組織」とどう調和し、「非 政府組織」の独自性を守っていくのか？が問われるだろう。国会の論議もありそんな中で「NGO-JICA 国際協力ネット ワーク」が形成されようとしたら、賛成しかねる。私の活動の原点は、「国際協力の3K（きつい、きかない、きけん） な所で活動することにある。現在のアフガンを観ても NGO は3K の活動で頑張ってきた。政府が臨時代理大使を 任命したのは最近で、NGO 活動の後塵を拝すること甚だしい。そんな中でこのネットワーク構築の意味、私は理解し にくい。</p>
	<p>同じような支援、交流団体を知り、各団体がかけがええる課題・問題点を再認識し、解決に向けて取り組める。異団体の 活動を知り、新しい活動のあり方を発見できる。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・情報及び他団体の形態が今ひとつ解らない。 ・趣旨目的が似ていれば協力し合えることもあるのでは。 ・活動内容が、パターン化して来ているので、少し脱皮の時期に来ている。

<p>・連携でパワーアップを計る。</p>	<p>個々の個体のノウハウを広く共有することによって、活動にあらたな広がりをもたせることができる。 例)「コンサート」や「パネル展示」などの各種イベントを共同して開催することを呼びかける。</p>
<p>NGOの利点：開催資金（会場費など）が削減できる。</p>	<p>他団体の活動を知ることが出来て、視野が広がる。 広報活動が今までと同じ労力のままでも簡単に広がる。</p>
<p>例) 海外援助のプロジェクトを各団体が協力して行う。</p>	<p>NGOの利点：新たな国でプロジェクトを行う際に、もともと、その国での援助に実績のある団体と協力することにより、事前調査の機関や費用が、短縮・削減できる。 「医療」「農業」「地域開発」など各々のNGO分野を越えた連携したプロジェクトの構築が可能になる。(ただし、会計などが複雑で面倒になる・・・)</p>
<p>四国内のNGOがお互いに顔の見える関係になっていない現状と、相互にNGO活動を展開していく上でのノウハウの共有が図れないという課題を考えると、ネットワークを構築すべきだという必然性が見えて来ます。特に都市部と違い、豊富な経験があるとは言えない点も踏まえて、ここ四国の土地柄や地域性を生かしたネットワークで、点在する力・ノウハウ・情報を集めるのは有益だと思えます。</p>	<p>四国内でも、多くのNGO団体が活動を行っている。 各団体がそれぞれ独自の情報網、技術を持って活動しているが、ネットワーク化により、情報交換、活動協力が行え、より効率的に活動を進めていくことが出来る。</p>
<p>各団体が得意とする分野、専門とする分野について知識や情報を共有できたり、互いの事業で協力したりできる可能性もあるため。</p>	<p>民間国際協力活動を、現地まででかけるなど、顔の見える方法で行っている団体をNGOとして集めることには必要性を感じる。</p>
<p>単独の団体でありますと</p>	<p>1. 対外的（日本外務省も含めて）に系統的に運動・陳情ができ難い。</p>
<p>2. 四国の力を集めて重点的な施策が考えられるから。</p>	<p>どこにどのような活動をしている団体があるということが、あまり知られていないので、ネットワークを通じて少しでも知られるようになればいいと思います。</p>
<p>1. 国際協力NGOの活動を県民にアピールするにはネットワークが有効</p>	<p>2. 各NGOの活動の補完をしようにはネットワークが有効</p>

2. 四国 NGO 連絡会が設立された場合の各団体の対応

団体	回答
	<p>活動面において、必要となった場合、互いの団体が交流しあい、勉強させていただけるようにしたい。他県へもそれぞれの団体の活動を知らせる機会を多くもちたい。</p> <p>他県団体と交流をもつことにより他県地元の方との交流の機会も増し、NGOをもっと広く知り合い深められるのではないかととも考え、できることなら団体を通し交流をもちたい。</p>
	<p>可能な限り、積極的に協力していきたいと思っております。連絡会には加入したいと思っております。</p> <p>どのようなネットワークが構築されるのかによって対応を検討したい。</p>
	<p>NGOの活動は、地方では、よく東京本部、徳島支部となつていて多くの団体が多く見られますが、地方にも多くの団体があります。やはり地方の1団体の力では協力者も限られ参加人数も多くなりません。そこで四国を一つの発信とすることで解決するのは？四国連絡会本部〇〇支部とかおもしろいのでは。</p>
	<p>上記の理由で Non 非政府組織としての立場を尊重したい。当団体は主に外国の現場で活動しているが、JICA から連携の話など来たためではない。従来から NGO と JICA との立場は同一時点では論ぜられない。あらゆる意味で官の組織は保護され、且つ甘えもある。「官」は NGO など、歯牙にもかけないという意識があった。それだけに PWJ の大西代表の東京での発言には、100%同意するものである。官が態度を変えたら別だが、現在では私の組織は、迎合せず「非政府組織」という旗を守りたい。</p>
	<p>今現在は、人員不足・資金不足によつてもし、連絡会が設立されたとしても、「各種イベント情報の広報依頼」「共同イベントの呼びかけ」「新プロジェクト計画における助成金制度の問合わせ」などの利用が現実になるであろう。しかし、将来的には海外での援助プロジェクトでの連携を試みたいものである。</p>
	<p>加入し、JICA四国支部を通じ、国内（四国内）交流を深めるだけでなく、現地JICAとの新しいプロジェクト（ハード・ソフト両面で）が可能となるのではないかと思われる。</p> <p>できる範囲で協力を惜しまない。</p>
	<p>現在、日々の活動に負われている状況。会議等に出席することが不可能と思われます。こちらが協力できることは、常にできる範囲で協力させていただきたいと思つていますが、本来の活動に支障が出ることは避けたいと思つています。</p>
	<p>連絡会に加入したい</p>
	<p>対応可能な範囲でのサポートを検討したい。</p>
	<p>可能な範囲での協力は借しまないで参加する。但し、団体の性格上、全体的なリーダーシップはとりにくい。</p>
	<p>オブザーバー的に参画したい。</p>

	県内の団体の“とりまとめ役”的な対応ができれば、と考えている。
	積極的な参加と情報提供をしたい。
	活動内容により参加
	協力していきたいと思っています。

以上

<四国地区 NGO-JICA 国際協力ネットワーク会議 3/10/02>

国際協力と NGO のネットワーキング
～アジアの貧困削減を目指して～

(特活)国際協力 NGO センター (JANIC)

常務理事・事務局長 伊藤道雄

はじめに

1、私と NGO のネットワーキング

- 1) 「アジア・コミュニティ・トラスト」(ACT) から「NGO 活動推進センター」(JANIC) へ
- 2) JANIC の誕生：ビジョンとミッション
- 3) 資金集め、人集めの苦勞
- 4) メンバー団体との関係

2、日本のネットワーク NGO の現状

- 1) 数と活動分野
- 2) 課題

3、ネットワーク NGO の役割

- 1) そもそもネットワークとは？
 - ① 定義のこころみ
 - ② ネットワークの3要素
 - ③ 組織？ 手段？
 - ④ 結び目（メンバー）に要求される姿勢
 - ⑤ 明確な目的の設定の必要性
- 2) ネットワーク NGO（ハブとして）の役割
 - ① メンバー団体へのフォーラム（場）の提供
 - －メンバー団体間の“対話”、共同事業推進の機会の提供
 - －メンバー団体間の意見・活動等の調整
 - ② 個々の団体では出来ない（困難な）活動
 - a) NGO スタッフの合同研修

- b) 政府・自治体・社会への提言活動
- c) メンバー団体の活動資金の掘り起こし（合同募金など）
- d) メンバー団体のアカウンタビリティ（説明責任）の実現と信頼性の向上
- e) 他

③NGO 活動の環境整備

- a) 市民／地域住民の啓発と参加・支援体制の促進
- b) 法制度（条例）、税制度の整備
- c) 行政、民間財団等からの補助金・助成金・委託金のあり方の改善
- d) 他

④他セクターとの窓口（経済界、教育界など）

⑤国際社会との窓口（海外 NGO、国際機関など）

- 3) メンバー（会員団体）に求められる責任
- 4) ネットワーク NGO に求められる人材

4、アジアの貧困人口半減とネットワークづくり（JANIC の新しい挑戦）

- 1) NGO 活動の目的の再確認
- 2) 「アジア貧困半減協働ネットワーク」（AJPN）
 - 「点」から「線」へ、「線」から「面」への国際協力へ

おわりに

- ネットワーク（信頼に裏付けられるネットワーク）は「財産」
- ネットワーキングは物事を成し遂げる「最大の武器」のひとつ

2002年3月10日

JICA 事業戦略調査研究「JICA と NGO との連携のあり方」中間報告

JICA 四国支部

有田 敏行

1. 調査の背景と目的

- (1) 近年、開発途上国のニーズの多様化、複雑化に伴い、従来の官主導型の ODA では（迅速な）対応が困難なケースが生じており、NGO や自治体との連携は大変重要になってきており、NGO や自治体もつ社会開発のノウハウを国際協力に生かし、ODA と連携していくことが今後ますます求められている。政府は ODA 白書において「国民参加型援助」の重要性を協調しており、これは様々な層の国民が ODA を理解し、国際協力に参加することを期待したものである。
- (2) 今後 ODA の国民参加の裾野をより拡大していく上で重要な視点の一つとしても、地域の NGO との連携が挙げられる。近年、JICA は比較的規模の大きな NGO との意見交換、情報交換を積極的に実施してきたが、地方の比較的規模の小さな NGO の活動状況については、あまり知らずにいるのが現状である。地域に拠点を置く比較的小規模な NGO との連携スキームである小規模開発パートナー事業もうまれ、今後 JICA の国内機関を中心に NGO との連携の地方展開を進めていくことが重要となっている。
- (3) JICA ではこのような視点に立脚し、本調査研究を実施することとした。本調査研においては地域密着型の国内 NGO と JICA（国内機関）との連携に焦点をあてて、今後の連携の方向性と連携の推進に向けての提言を取りまとめることを目的としている。

2. 実施体制

委員（3名）：大阪大学大学院 内海 成治 教授

日本国際センター 秋尾 晃正 代表

熊本大学医療技術短期大学短期大学 松山 章子 講師

JICA タスク：国内事業部国内連携促進課 藤井 知之 課長 他8名

（国内連携促進課4名、企画部企画課1名、センター・支部4名）

事務局(JICA)：国際協力総合研修所調査研究第二課 小幡 俊弘 課長 他3名

3. 四国現地予備調査の報告（JICA 国内事業部）

予備調査は、効果的な設問内容を検討するための情報収集、アンケートだけでは読みとれない NGO の実状の把握、JICA と NGO との双方の情報交換を図ることの3点を目的とし、高知県、香川県の国際協力 NGO 4 団体を対象に行った。

予備調査から得られた主要な点は以下の通りである。

- ・ インタビューを行うことで、NGO から得られる情報は格段に多くなる。
- ・ 全体の傾向をつかむために、アンケートによる意向調査も併せて実施する必要あり。
- ・ 今回訪問した団体については、小規模開発パートナー事業による連携は必ずしも有効ではなかった。
- ・ 各団体が共通して JICA に求めたことは、現地でのコーディネータとしての役割。

4. NGO との連携の重要性と基本概念について（内海座長）

（1）日本の NGO の動向

- ・ 日本における NGO の数はおよそ 400 団体。
- ・ 多くは予算規模が小さく、予算が一億円以上の団体は 32 団体。
- ・ 90 年代以降は、新しい NGO の設立数は激減。
- ・ 多様性が特徴（活動分野、地域、実施の方法、NGO を担う人々（ボランティア）など）

（2）NGO の発展段階

- ・ コーテン(1990)によると、NGO は第一段階から第四段階までに分類できる。それぞれ、「救援と福祉」「自立に向けた小規模な地域開発」「持続的なシステムの開発」「民衆の運動」と位置付けることができる。
- ・ 現実の NGO は第一世代から第三世代のどこかに位置付けられるか、世代にまたがって活動している。第4段階は実在せず、コーテンの理論の中に形成されたものである。
- ・ 発展段階として提示されているために、あらゆる NGO が目指すべき筋道であり、第一世代は遅れているという判断をしかねないことが問題である。

（3）ODA と NGO の連携とはなにか

なぜ NGO が必要なのか：民主社会の要請、民主的な社会の市民に必要なものは個人の
尊厳と社会への参加である

個人を大切に直接的社会参加を促すものがボランティアであり NGO である。

ボランティアや NGO の存在は市民社会の成熟をはかるものさしであり、政府は NGO の振興策を実施することが重要である。

民主的な ODA は必然的に NGO を要請し、NGO は重要なパートナーとなる必要がある。

また、そのためには、JICA と NGO が共有できる場が必要と思う。同じ場を共有することでそれぞれが創造性を発揮することができる。

生き生きとした国際協力は行うには、幅広い人々の創造性に支えられることが必要である。

5. NGO から見た連携の基本概念について（秋尾委員）

（1）日本の NGO の現状

- ・ 日本では、欧米で見られたような政府の政策で市民団体が育成されるという歴史はなく、NGO の法整備も不十分であり、国策担当者と NGO の人的移動も全くない。また、財政規模が脆弱で募金活動もほとんどが国内である。
- ・ 欧米の NGO の活動は Top Down であるのに対し、日本は bottom up で途上国の CBO(Community Based Organization)の自立促進を目指し、多様な価値観に対応している。
- ・ 日本の国際協力 NGO 約 400 団体のうち、「国際協力 NGO ディレクトリー」に掲載された 238 団体を対象にした分析によると、財政基盤が脆弱であり、法人格を持つ団体や、有給のスタッフが少ない。
- ・ 今後は、日本の一村一品運動団体や、地域に根ざした国内の専門性を持った NPO が、国際協力活動を展開することが期待される。

（2）方法論

- ・ JICA、JANIC の協働活動が重要である。日本の NGO の国際的ネットワークを整理すると（図 1 参照）JANIC は南の NGO とのネットワーク、日本の International NGO は海外事務所における多様な活動実績が特徴であることから、それらを強化すると同時に、JICA としては、県への政策提言や県の協会に協力要請をすること等が求められている。
- ・ 日本には、国内で活動している専門性をもった各分野の NPO が多く存在することから、それらと国際協力を行う NGO との連携が必要。その際、国際交流団体が架け橋となる。
- ・ 既存組織である地域国際化協会の有効利用の例として、埼玉県方式は参考になる。また、地域国際化協会が、他分野の CSO (Civil Society Organization) に国際協力 NGO を紹介する役割も果たすべき。
- ・ 都県の国際課は各部局の調整役となり、基礎自治体が仕掛けた「地域おこし」「町づくり」を国際協力活動へと、共に発展していくことを提案する。

（3）各セクターの役割

途上国と日本の地方の NGO 同志が連携する際には、各セクターが次の役割を果たすこ

とが求められている。

- ・ International NGO は、総合計画の策定。
- ・ 途上国側は、国レベル（内務省等）での承認、県レベルの指示を行い、県の政策へ発展させる。そして、郡や基礎自治体が地域のパートナーとなり CBO が実施、Local NGO が行政のフォローアップを行う。
- ・ 日本側は、県の国際課で国際協力の位置付けを明確にし、市町村が町づくり課を窓口として地域興しの団体を参加させる。国レベルの支援が必要である。

(4) 日本の NGO の役割

総合企画作成、調整、フォローアップ、評価を担う役割として期待される。

提案「JICAとNGOとの連携会議」の着想～



平成14年3月10日
 協働力事業団 四国支店
 菊地 太郎

この出発点



- JICAとNGO等国際機関に関する調査研究 (1.3.16-3.17)
- アンケート「JICAへの要望」
- 事後アンケート「意見交換会に参加した感想」

JICAとNGOとの連携



連携の必要性
 連携の形態～JICAの連携事業～
 調査研究「JICAとNGOの連携のあり方」

提案～四国NGO連絡会設立構想～



平成14年3月10日
国際協力事業団 四国支部
菊地 太郎

出発点

- 「四国地区自治体・NGO等国際協力に関する意見交換会（2001.3.16-3.17）」
- 事前アンケート「JICAへの要望」
- 事後アンケート「意見交換会に参加した感想」

JICAとNGOとの連携

- JICAにおける連携の必要性
- 連携の形とは～JICAの連携事業～
- 調査研究「JICAとNGOの連携のあり方」



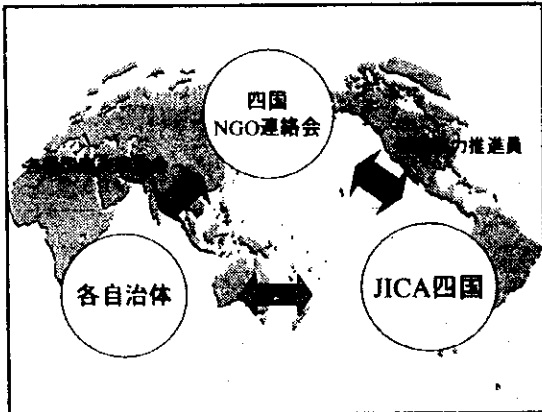
四国におけるNGOとJICAの連携

- スキームを介した連携
 - 国際協力・オイスカ四国研修センター
 - 国際協力パートナー事業（徳島で国際協力を考える会）
 - 広報/開発教育事業
- 情報交換、コミュニケーションの仲介役
 - 国際協力推進員の配置
 - 意見交換の機会提供

→ **四国NGO連絡会の提唱**

四国NGO連絡会の設立（案）

- 各自治体のNGO
- 各自治体の連絡先、JICA、自治体での下回り体制
- 各県国際交流協会、JICA国際協力推進員の重要性



自由討論

- NGO側から見たJICA、各県国際交流協会の連携
- NGO側の考える連携、ネットワークの必要性



（案）検討

● 各地域NGO活動の連携を目指して



JICA